

News Letter



■2010年4月5日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

三重大学の
実践事例

2009年度 PBL教育支援プログラムの成果報告

PBL教育におけるファシリテータとしての教師のかかわり

導入した科目の概要及び学生の到達目標

対象授業は、2009年度教育学部で開講された専門授業（教職に関する科目）の「総合演習」である。この授業のキーワードは、「関係発達、子育て、学校・家庭、親子活動（体ほぐしの運動）」であり、少子・高齢化を迎えた日本社会のなかで、関係発達という考えから子育ての根源を問い直し、現在の学校・家庭の根底に横たわる問題に気づき「自らの問題」を設定し、それを受講生で共有していく対話・共創型の学びを行うことを授業の目的としている。

実際の授業は、次の5部構成で展開された。

第1部：問題把握/関係発達論的アプローチという視点と昨年度の取組概要の把握

第2部：Project I /小規模特認小学校における親子活動の企画・実践・振り返り

第3部：Project II /公立幼稚園における親子活動の企画・実践・振り返り

第4部：実践整理/実践報告書・プレゼンテーション資料・新聞投稿原稿の作成

第5部：報告会と問題提起/実践報告会と社会に対する問題提起（新聞投稿）

なお、学生の到達目標は、「問題把握の深さ」と「問題解決の視点の確立」の2点である。

PBLを導入した意図・目的

基本的には担当しているほとんどの授業においてPBLを導入している。正確に言えば、小学校現場から大学現場へ転じた11年前からPBLに取り組んでおり、それ以前も小学校現場において学習者の能動的学習に取り組んでいたため、HEDCが進めるPBLを「導入した」という意識は全くない。しかしながら、HEDCが提示している「PBL教育の6要件」さえ満たせば（それを行えば）、PBL教育になるのだという安易な考えが広がらないためにも、昨年度よりPBL教育支援プログラムに応募させていただいている。本稿では、PBL教育におけるファシリテータとしての教師のかかわりについて報告する。

方法

ファシリテータとしての教師のかかわりについて、特に留意した点は次の3点である。い

ずれも「学び」をfacilitateとするという観点である。

①**本物の学び**／模擬授業や疑似体験ではなく、実際の現実世界（生の教育現場）に学びの場を設定する。失敗が許されない状況、逃げさせない状況をあえて設定する。

②**ジャンプのある学び**／手を伸ばせば届きそうな課題や一人で取り組んでも届きそうな課題を設定しない。ジャンプしなければ、他者との協同なしでは届かない課題を設定する。

③**デザインとしての学び**／一度立案したプランや作成したレポートにこだわらせない。「なぜ、そうなのか」を聴くことに徹し、問題や他者をつなぎ、原点にもどしながら、つみあげ、再構成していくデザインとしての学びを展開する。

内容

ここでは二つのプロジェクトの内容を取り上げる。以下は、学生が作成した実践報告書から「問題」と「今後の課題」にあたる部分を抜粋したものである。

Project I 小規模特認小学校における親子活動

この地域の特徴は、子どもたちに対する地域ぐるみの教育が今でも根強く残っており、A小学校はその拠点となっている。地域の人々がそれぞれにつながりを持ち、お互いを知り合っており、1つの大きな家族のような関係にある。また、親子関係も良好で、それが子どもたちの全生活の基盤となっている。しかし、私たちは、このようにお互いをよく知り合っている地域とは言え、まだまだ知らないことがたくさんあるのではないかとこの疑問を抱いた。特に親子において、お互い知っていそうで知らないことがたくさんあるのではと考え、それを知り合う場を提供しようと考えた。これを私たちは「新発見」とし、今回の活動のテーマとして設定した。



(Project I の続き) 私たちの考えた活動は、自分の今まで見せたことのない部分を「出す」ところに重点を置いていたが、「出す」だけでは「新発見」にならないことに気がついた。発見には自分を「出す」者と同時に他人を「容れる」者の存在が必要であり、その両者が必要であり、重要である。他人を「容れる」とはどういうことなのか、これを更に深めることが今後の課題として浮かび上がった。

Project II 公立幼稚園における親子活動

現代は、危険なこと怪我をしそうなことを子どもから過剰に取り上げていると感じる。それは子どもが「ちゃんと子どもする」ことができる、スリル・チャレンジのような感性や身体性に通じるハラハラ・ドキドキする時間や空間を奪ってきたのではないかと考える。チャレンジやスリルは信頼やかかわりを生み出すと考えるが、それらを奪うということは「ちゃんと子どもする」ことだけでなく、信頼やかかわりをも奪ってしまうことになるものと思われる。そこで私たちは、一般的な親子活動で行われるふれあい活動をあえて行わず、スリルを味わえる場を提供することで、「ちゃんと子どもする」という主題を掲げた。今回の親子活動を終えて、「ちゃんと子どもする」ためには、やみくもに危険な場を用意するのではなく、身体性をベースとして、「挑戦」と「共感」を「つながり」がつなぐというサイクルが必要になることが明らかとなった。場の工夫だけでなく、いかにこのサイクルをつくり出すかが今後の私たちの課題となる。



成果と今後の課題

成果としては、次の3点があげられる。

第1に、平成22年2月19日に開催された三重大学教育学部主催による「隣接学校園との連携に対応できる教員養成フォーラム(平成21年度採択大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム)」において、学生がポスター発表並びに口頭発表を行った。その取組内容については、中川副学長より「学生たちが大学で学んでいることと、現場でのご指導がよい相互作用を生みだし(中略)学生にとっても現場にとっても、良い学びの場の場になっている」とのコメントを得た。また、学生の発表内容を聞いた教育現場からは、「私たちの学校園でも実践してほしい」との声が寄せら

れ、今日現在で幼稚園1園、小学校1校において平成22年度のプロジェクトが予定されている。

第2に、社会に対する問題提起(新聞投稿)の取組において、1件の投稿原稿が採択された(図1, 朝日新聞朝刊, 若い世代 2009/10/11)。

第3に、本授業終了後においても受講生有志による1本の親子活動が企画・実践されたり、2本の親子活動にアシスタントとして参加するなど、学びの継続があった。また、こうした取組を概括する方向で、「第3部: 演習II/公立幼稚園における親子活動」の取組の幼稚園を中心とした現場教師たちと三重大学(教員・学生)の協働による教材開発(「幼児教育で大切にしたい運動遊び」)を行った。作成した教材(図2, ポスター・カード)は、津市内並びに四日市市内の全幼稚園に配布され県内の教育委員会や学校園, 教育関係機関などに配布された。

以上の成果と授業改善アンケート「総合的に判断してこの授業に満足できた4.8(満点は5)」という結果より、ファシリテータとしての3点の教師のかかわりは、おおむね機能していたように感じられる。教育方法の転換は教師の教育観・学習観の転換と連動されるべきものと考えため、PBL教育の理念が表層的な授業のやり方のみに陥らないように、さらなる「学びの支援者・促進者」としての教師の役割について明らかにしていくことが今後の課題である。

(教育学部 岡野 昇)

図1

「子どもする」大人でありたい

大学生 廣 智恵里
(三重県松阪市 21)

大人はどうも素直ではない。愛想笑いをする。嫌なことでも、いい顔して引き受ける。危険なことには、最初から手を出さない。それらは社会を生きていく上で必要不可欠なことであり、いつの間にか私自身も身につけている術である。それに引き換え子どもは素直だ。楽しい時は笑う。気が乗らなければ、はっきり「NO」と言う。私たちは授業の一貫として地域の幼稚園

や小学校で「親も子も、ちゃんと子どもしよう」というテーマのもと、親子活動を行った。そこには子どもに負けないキラキラして笑顔を見せる親がいた。親たちが楽しそうに活動しているのを見てうれしくなった。が、普段、どれくらいの人々がめいっばいに笑い、体を動かしているだろうか。人は年をとるほど多くの人と縦へ横へとながりを広げてゆく。その時、付き合い方や建前は必ず必要になる。そんななかでもいつまでも「子どもする」ことが出来る大人でいたい。そんな機会が多々ある環境であってほしい。

図2



*ポスター・カードをご希望の方は、Email:okano@edu.mie-u.ac.jp まで。